

# 分苑たより

## なごみ

大本  
名古屋分苑

### 分苑長

#### 霜月 月次祭挨拶

サルートン

皆様こんにちは、霜月の月次祭にご参拝頂きありがとうございます。

本日、私は亀岡で全国会長・人類愛善会協議会長会議に参加しており、皆様方に直接、挨拶が出来ず申し訳ありません。

十一月二日の開教百三十三年の開祖大祭は秋晴れの爽やかな陽ざしの元で執行されました。

前日には亀岡瑞月舎（旧婦人会館）竣工七十周年慶祝茶会が午後零時半から開催され、多くの方達が訪れました。また、ここに金婚式と七五三のお祝いにも多くの方達がお見えになりました。

あと一月余りで令和七年の年が終わりますが、今年は

五・六・七ミロクの最終年で十月十二日には教主さまご臨席のもと綾機平で綾の聖地エルサレム大本歌祭りが開催され、多くの参拝者がお見えになりました。

翌週の十九日には三重の香良洲神社に教主さまがご臨席になり、世界平安祈願合同祭典が執行されました。またご神宝を再度、神楽殿にて拝見させて頂く事が出来ました。

今月の二十二日には誠心会設立二十周年記念「世界平安祈願祭」が全国誠心会会員により執行され、名古屋分苑から日比達朗様が祭員奉仕されます。

十二月六日の月始祭には、令和八年度の行事予定表を配布させて頂けます。また月始祭終了後に令和七年度の暫定決算と令和八年度の予算を総代の方に審査していただきます。案内状は、総代の方

の棚に入れてあります。

十二月二十一日の月次祭には、前田特派が来苑されます。

最近インフルエンザの感染者が増えつつありますので、どうか健康に気を付けてお過ごし下さい。

本日の参拝ありがとうございます。ありがとうございました。コーランダンコン

### 行事報告

#### ●月始祭

十一月一日（土）

参拝者	十一名
斎主	見田すみ子
祭員	五十川松子
祭員	畠山 亜美
進行	天野 芳幸



#### ●月次祭

十一月十六日（日）

参拝者	三十八名
斎主	飯田 和彦
祭員	仙頭 志音
祭員	堀 健太郎
祭員	日比 達朗
裏方	伊藤久仁男
典礼長	小林 清人
伶人	飯田 直美
伶人	澤田 淳
伶人	佐古 美鈴
伶人	長谷川美枝
進行	五十川松子



#### ●誠心会活動報告

十一月二十二日（土）～二十

十三日（日）の秋晴れの二日間、天恩郷と梅松苑にて第九回誠心会会長会議・第二十二回誠心会員研修会が開催されました。

二十二日は午

後一時より万祥殿に於いて誠心会設立二十周年記念「世界平安祈願祭」が執り行われ、選ばれた地方機関の誠心会員が祭員や祭典係、司会などを務めました。



名古屋分苑からは津島支部の日比達朗さんが祭員として参加され椅子後取を担当されました。

教主さまからは年齢的にも落ち着いたいい祭典でしたと感想をいただき、祭典後には誠心会・直心会・青松会・青年部と4部会ごとに御面会を賜りました。

後の教団活動方針では令和八年三月三十一日の綾機神社地鎮祭、五月四日の教主さまご就任二十五周年・古希慶祝「梅松祭」、第二十八回全国愛善歌奉納大会、五月二十三・二十四日の鉢伏山開き八十周年記念、九月八日の神島開き百十周年記念祭典等の説明があり、その後、各機関を代表して六名から活動報告が行われました。また、事務局の方から教主さまのお言葉として、「世の中が変わって来ているので、私たち信徒も変わっていかなければいけません」との、お示しを頂きました。

翌二十三日（日）は紅葉も

真つ只中の天王平・奥津城にて枯れ枝除去

の献勞奉仕を行い、十一時三十分閉会式後、昼食、解散しました。



参加者 三名

日比達朗、高嶋善雄、

畠山 茂 報告

## 行事予定

十二月二十一日（日）

月次祭 午前十時半より

後期機関長会議・研修会

十二月二十八日（日）

年末大掃除 午前十時より

十二月三十一日（水）

大祓祭 午後一時半より

令和八年一月一日（木）

新年祭 午前十一時より

## 霊界には限界がない

物質世界には何事にも限界というものがあるが、霊界にはそれはない。たとえば、この肉体はいかに長寿したといっても、いつかは滅びる時がくるが、霊魂は無限に生きとおしである。現界は地面にも限りがあり、時間にも限りがあるが、霊界にはそれはない。

物を人に与えることは、与えるだけは自分のが減るのだが、精神的のものをあたえる場合は、決してそうでない。いくら人をほめても、気の毒だ、かわいそうだと思ひ、かつ、慰安の言葉を与えたところで、それがために、自分の持っている魂の量が決して減るものではない。

この理をよく考えて、われらは常に自己の霊を培いやすいこと、および、他人の霊の面倒をみてやることを怠ってはならぬ。

信仰覚書 第三巻より

## じいじの道草雑話

### 【迷い道】

特任宣伝使 妹尾 正治

じいじが十八才で運転免許を取った頃（昭和四十二年）はカーナビの様な便利な道具は無かった。

初めての目的地に向かう時は事前に地図で確認し、曲がる交差点を記憶して出かけたものだ。

それでも一本道を間違えると、今何処にいてどう進めば良いのか解らず、聞く人もいない所では途方にくれたものだった。

少年夏季学級からの帰り、夜の山中で二股の分かれ道を間違えてしまい大きな川の土手に突き当たってしまった。川下に行けば市街に出ると思ひ、暗い川面に目を凝らしてみたらさっぱり解らない。

『取り敢えず左！』と三十分ほど走ったら町の明かりが見えてきた。

二時間ほどで帰れるところ三時間以上かかってやっと家

にたどり着くことが出来た。

この時ほど灯りのついた我が家の有難さ、心配して待っていてくれた奥さんの心の温もりを感じた事はなかった。

島根県津和野町出身の絵本作家、安野光雅さんがこんなことを綴っている、「私は、見分をひろめるためではなく、迷うために旅に出たのだとした」「人間は迷ったとき必ず何かを見つけることができる」と

じいじも同感である、順風満帆な人生を送った人より、道に迷っては新たな道をみつけたら、失敗を糧にして力強く生き抜いてきた人ほど他人に優しさと温もりを与えることができる！と。

迷えるじいじの独り言『嗚呼！カーナビのおかげで最近道に迷うことが無くなった代わりに新しい発見やドキドキ・ワクワク感が少なくなつて淋しい！』

